

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ザフィマニリ集落とヴァトゥ・ラヒ建立をめぐる覚え書き

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内堀, 基光 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00000945

第7章 ザフィマニリ集落とヴァトウ・ラヒ建立 をめぐる覚え書き

内堀 基光

放送大学

マダガスカル中央高地東側縁辺部にすむザフィマニリの建てる柱状立石についての観察を、マダガスカルおよび東南アジア島嶼部における死者にまつわる儀礼との関連でとらえようとする予備的考察である。ザフィマニリでヴァトウ・ラヒ、すなわち「男石」の意味をもつ立石は、遺体を納めるという意味では墓ではないが、死者の生を記念するものとして、死後1年ないしそれ以上後に、集落の端に設けられた壇の上に立てられる。観察した集落ではこの壇は集落の南北に置かれるが、この配置はザフィマニリ集落で Bloch が指摘している社会組織上の二分法に一致しているように見える。これを建てる祭りのプロセスの観察記録を記載し、それとともに、ザフィマニリ集落住民の生業と減退する森林の関連、および二分法に通じる集落の空間配置について触れる。

- | | |
|-------------------------|-----------------|
| 1 マダガスカルの死の文化 | 3.1 集落の概観 |
| 2 ヴァトウ・ラヒのある風景 | 3.2 ヴァトウ・ラヒ建立儀礼 |
| 3 イファシナにおけるヴァトウ・ラヒ建立の儀礼 | 4 これからの課題 |

* キーワード：ザフィマニリ、柱状立石、死者儀礼、二分法、森

1 マダガスカルの死の文化

人類学・民族学上で人間の死を語ろうとするとき、ロベール・エルツによる「死の集団表象の研究」(Hertz 1960, 原著は1906) はいまや古典の地位を確立したと言える論考だが、このなかで考察の材料として使われた民族誌資料は、第一にボルネオの諸民族集団、すなわちムスリム住民をのぞくダヤクと総称される在来の民の報告からとられている。量的にはだいぶ差があるが、それに次ぐのがおそらくマダガスカル各地からのものであろう。具体的にはファン・ヘネップによるマダガスカル民俗資料集成が多く利用されている。それほどに、この両方の地域では死にまつわる文化現象——死体の取り扱い、盛大な死者儀礼、他界観などの複合——が目立つものとしてあり、しかも共通の基盤をもっているということである。

時代は下って1970年にはイギリスの社会人類学者モーリス・ブロックが、マダガスカルの主要民族集団で首都アンタナナリヴの近くに住むメリナ人における葬儀の執行方法を鍵として、住民の親族組織を探った研究書を刊行している (Bloch 1971)。この研究

はほとんど東南アジア島嶼部との比較をせず、むしろ J. Goody をはじめとしたアフリカ大陸における英国社会人類学者の仕事を対照枠として念頭に置きつつ議論を進めている。だが、理論的な枠組は別として、この本に書かれたメリナ族の死をめぐる制度、とりわけファマディハナ (famadihana) と呼ばれる改葬 (第二次葬) の習俗は、いかにも島嶼部東南アジアとの強い関連性をうかがわせるものであった。

さらに1980年代になると、メトカーフとハンティントンという2人のアメリカの人類学者が、北西ボルネオのブラワン族とマダガスカル南部のバラ族の死の観念と儀礼の比較研究をおこなった (Huntington and Metcalf 1979)。私自身は1975年以来西ボルネオのイバン社会における死にまつわるもろもろのことを調査し、隣のスラウェシ島に住むサダン・トラジャのそれとあわせて1冊の本を出したことがある (内堀・山下 1986/2006) が、この点では私よりやや先にボルネオで似たような調査をしたメトカーフに、再度先を越されたような気がしたものである。この感覚によって喚起されたごとくに、私のマダガスカル調査の動機の第一は、自分自身でボルネオとマダガスカルの死の習俗の比較を試みたいというものであった (内堀 1997)。

「祖先墓」に同族成員の遺体 (というか遺骨) を集中させてこれを祀るという習俗は、上にあげたブロックが研究したメリナ族の社会で顕著なものである。メリナ以外でもマダガスカル全土で類似の習俗、つまり改葬=第二次葬は見られるが、石造りの立派な墓や、墓にあらたな死者の遺骨を納めるときの儀礼の盛大さなどで、メリナの習俗は確かに卓越している。だがメリナ以外の社会でも、近年の傾向として、メリナ風の耐久性のある墓——いわば「永代墓」——をつくるのが流行りだしているという。それとともに死者儀礼のあり方にも変化が生じてきていることは、森山工がシハナカ社会についての見事な民族誌のなかで明らかにしている (森山 1996)。これは基本的にはシハナカと隣接するメリナの影響、あるいはことによるとその文化的覇権——可能性は高くはないが——によるものだろうが、同時に人が生きる生活の範囲の拡大に由来する動機を見逃すわけにはいかない。人が生きるための地理空間がひろがり、生きているあいだに密着したつきあいを続けることが困難になればなるだけ、死の後に親族集団の凝集性を表現する必要が増すのだとも言える。あるいはまた、この凝集性は、死後においてしか可能でなくなりつつあるのだと言った方がよいかもしれない。

本稿では、マダガスカル中央高地の中央に位置するザフィマニリ (Zafimaniry) と呼びばれる人びとの死の習俗の一端を記述する。この報告自体は予備的なエッセイといったもので、その全体を見通すということからはほど遠いところにあるが、大きな枠組としては、上に述べた死の文化の比較を目指そうとする企図の一部である。

2 ヴァトゥ・ラヒのある風景

マダガスカル中央高地の中央に位置するアンブシトラ Ambositra の町から国道沿いに南へ16キロメートル、そこから2級道路を南東に向かって30キロメートルほど走ると、アントゥエトラ Antoetra という集落に着く。この集落がみずからをザフィマニリの居住域への南の側の入り口であり、20ほどの集落（fokotany）から成る同名の行政村（commune rurale）の中心地である。

ザフィマニリは公称18と言われるマダガスカルの主要民族集団には数えられていない。彼らは比較的最近に至るまで、タナーラ Tanala（/Tanjala/）の一部と言われたり、またベツィレウ Betsileo の下位集団とされてきた。客観的な事実としては、方言的・文化的にザフィマニリは確実にベツィレウの一部としか言いようがなく、タナーラとはより大きく異なるが、その森林に適応した生業と、行政村中での混在を含む地理的近接のゆえに、タナーラ（原義は「森の民」）と一まとめにされてきたのだと言えよう。

ザフィマニリの地は、現在ではさまざまな観光案内本のなかで、訪れる価値のある地域、住民として推奨されている。私は1996年以来2005年まで、1回ごとの期間はごく短い、ほぼ毎年のようにこの地を訪れていた。定点調査地はアントゥエトラから北東方向へ道ので5キロメートルほどのところに位置するイファシナ（Ifasina）という集落である。この集落はアントゥエトラから距離的にも社会的にも近いが、行政的にはもうひとつ別の行政村であるアンブヒミトンプ（Ambohimombo）に属している。私としてはここで人類学・民族学の集中的調査に乗り出す気ではあったのだが、その後の身辺の変化でしばらくこれを中断せざるをえなくなっていた。本稿はこの中断中に書かれたが、さいわい2011年2月に6年ぶりにこの村を訪れることができ、いくつかの観察・情報を加えることができた。



写真1 イファシナ全景

アントゥエトラから5キロメートルの道は丘越えが2つあるが、あとは視界の開けたなだらかな丘陵稜線を歩いてゆく。この開けた風景はザフィマニリを訪れる西洋人の観光客にとっての魅力の1つであり、これを辿ってイファシナまで来る観光客は2日に1組よりは多い。もっともアントゥエトラからは丘の頂まで一気に200メートル以上直登するので、脚にまったく自信のない観光客にはこのルートはとれない。この丘の頂きに達すると、アントゥエトラの家屋群と周囲の水田を眼下に見はるかす地点に、ひと塊となった柱状立石群が姿を現わす。石を組み合わせて作った壇があり、その上に立石のが立っているのだが、こうした壇はこの地点に2つある。現地の案内人はこれらの石をひとまとめにしてヴァトゥ・ラヒ (vatolahy) と呼んでいる。直訳すれば「男石」である。背の高いもので地上に現われた部分だけで2メートルほどもある。低いものは1メートル程度だが、大小の差はあれ、いずれも縦横比にわずかながら差がある直方体の立石で、文明史的な文脈を気にせず言えばメンヒルという語をもって呼ぶのに相応しい、いかにも巨石的な建造物である。ザフィマニリの居住する諸集落、あるいはそれを結ぶ草原の道の傍などに、こうした立石が一塊になったり、あるいは単独のものとして散在している。ともかくもザフィマニリの土地では目立つ存在物であり、彼らの住まう地の風景を一面で特徴づける標とも言えるものである。

実はヴァトゥ・ラヒ（「男石」とは言っても、やや目立たないながらもヴァトゥ・ヴァヴィ (vatovavy) と呼ばれるもの、つまり「女石」との対比で「男」と呼ばれるものであって、単独で立つヴァトゥ・ラヒを別にすれば、壇上に群れをなすすべての石をヴァトゥ・ラヒと呼ぶのは、厳密に言えば正確ではない。ヴァトゥ・ヴァヴィは円盤形の石で、直径20から40センチほどにわたるが、厚さはいずれもせいぜい10センチ程度のものである。素材となっている石はヴァトゥ・ラヒもヴァトゥ・ヴァヴィも、この近隣に多い岩山を作っている岩石（比較的柔らかい）のようである。さて、この男女の石たちとは、いったい何か。現地の案内人は、死んだ人のための石、あるいは祖先のための石だと言うが、どのような意味で死者または祖先と関連しているのか。



写真2 ヴァトゥ・ラヒの壇



写真3 牛の殺害

マダガスカル中央高地を国道に沿って動いていて目に着くものの1つは、なんとと言ってもメリナの人びとの建てた石造りの墓屋である。これが本稿冒頭に言った「祖先墓」として現在ふつうに見られる姿なのだが、これは普通には親族関係にある複数の人の遺体ないし遺骨を納めた墓である。こうした内部に空間を作り出す構造物に比べると、ヴァトゥ・ラヒ（と、付属するヴァトゥ・ヴァヴィ）は実に単純な人工物ではある。そもそもヴァトゥ・ラヒは容器性をもっていない。では、ヴァトゥ・ラヒの存在はそこに別の何ものかがあることを示す標識なのか。答えは然りであり、また否である。単純な意味でヴァトゥ・ラヒは墓標ではない。つまり、その下に遺体が埋葬されていることの標識ではない。だが、先ほど述べた丘の頂の古いヴァトゥ・ラヒはともかくとして、新しいヴァトゥ・ラヒには、個人の名前、さらにはその人の逝去日が書いてあることが多く、こうした場合には、明らかに特定の死者個人に対して作られたものである。このことから見れば、ヴァトゥ・ラヒは死者ひとりひとりのための記念碑のようなものであり、その点では、やはりある種の墓標なのであろう。ヴァトゥ・ラヒのてっぺんには角を揃えた牛の頭骨が置かれていることがある。いかにも供犠の名残であるが、仮にそうだとすると、この供犠はいかなる機会に行なわれたものなのか。ヴァトゥ・ラヒが記念碑的なものとしての墓標であるとして、そのことは供犠とどのような関連があるか。またヴァトゥ・ヴァヴィとはどういう関係にあるのか。およそこうしたことごとを考えつつ、ヴァトゥ・ラヒのある風景の道を辿ってゆく。

1997年9月の中旬、アントゥエトラの集落でファマディハナが行なわれた。それまで滞在していたイファシナ集落から4泊の泊まりがけで、イファシナの人びととともに出かけにいった。イファシナにおける私の数年来の宿泊（居候）先の主婦がアントゥエトラ出身者だったことも含めて、両集落の人びとのあいだには近い親族関係にある者が多い。そのためかほとんど集落全体をあげて、丘の道を一列をなして進んで行った。途中の分岐点で別の集落からの一隊と一緒に合流はせず、祭の客として集落単位で参

加するという形式を取ってアントゥエトラに入った。とはいえ、ファマディハナで「祀られる死者」—— というか、新たな布で包みなおされる遺体—— をもつ「イエ」の近親者は、客というよりも儀礼の主催者に近い立場で、むしろ客の接待など労力の提供のために参加したようにみえる。

ファマディハナというのは現在のメリナの場合であれば、先述したような家屋型の祖先墓から遺体を外へ出して改葬（遺体の再処理や包み直し）することが儀礼の中軸である。アントゥエトラの場合にも儀礼過程のこの中軸的な局面に違いはないのだが、大きく異なる点は、遺体を納めた墓が岩山の麓あるいは中腹の大きくは土質、一部は石質の部分に穿たれた横穴だということである。横穴の規模はかなり大きく、隧道の奥行きは10メートルを超えているように思われた。奥の広まった空間は高さも人の身長以上あり、その壁面に壁龕が複数段作られており、そこに遺体が置かれている。1つの横穴墓に10体を優に超える遺体が置かれているが、これはこれらの横穴がそれだけの年月を経ていることの証しである。これらの遺体間の関係については調査するまでには至らなかったが、これがアントゥエトラ集落の親族関係のまとまりのあり方を解き明かす鍵になるだろうことは確かである。横穴墓の入口はふだん石板で閉じられている。この石板も付近の岩山からのものようである。これもこの付近の岩山の石質の脆さの証左ではある。

アントゥエトラのファマディハナでは横穴から遺体が次々に運び出され、しばし人々の肩に「みこし」のように担がれて墓の周囲の野をめぐる。その後、遺体はそれぞれに親族によって新たな布で包みなおされ、ふたたび横穴墓内のもとの壁龕に戻される。祭の主催世帯と客人とのあいだのやり取りを別にすれば、ファマディハナの主要な儀礼局面はこの遺体関連処理に限定されているようである。アントゥエトラにおけるこの祭と遺体処理のあり方の起源あるいは歴史については、いまだ調査していないが、おそらくはメリナのファマディハナを真似るかたちで導入したものと考えてよいと思う。マダガスカル全体ではないとしても、中央部に広がりつつあるファマディハナの「国民文化化」の一環と見ることが可能である。アントゥエトラにも新しく立てられるヴァトゥ・ラヒ群は存在するようだが、アントゥエトラを見下ろす丘の頂きに立つそれらには、今は新しく加えられる立石はない。

アントゥエトラでは、ファマディハナの導入とヴァトゥ・ラヒ建立の継続は、すくなくとも部分的に両立しているように思われる。論理的にはこれら2つの習俗は併存が難しいと想定されるのだが、かならずしもそうはなっていないようである。これについては、次にイファシナのヴァトゥ・ラヒ建立の実際を報告し、その後にあらためて考察することにした。

3 イファシナにおけるヴァトゥ・ラヒ建立の儀礼

3.1 集落の概観

フランスの地理学者クーローの聞き取り調査によれば、ザフィマニリの集落（全地域で50ほどある）に関しては、ほぼそのすべての中核住民およびその祖先の移動経路とおおよその移動時代が特定しうる（Coulaud 1974）。クーローは19世紀初頭をもって彼らの現在地への拡散的移住の開始と推定し、この移住の主要因を、南進するメリナおよび東進するベツィレウの支配からの逃走であるとしている。ザフィマニリ全体の起源問題は別にして、この報告で話題にするイファシナ集落の祖の中核部分は、この地域の北東方向からの移住者であるらしい。この入植の歴史的経緯が、距離的にはアントウエトラに至近であるにもかかわらず、この集落を北方のアンピミトゥンプ行政村（15の集落から成る）に属するものとしている理由であろう。

この地への入植から長い間、ザフィマニリは焼畑で各種のタロイモ、トウモロコシ、インゲンマメを栽培するいっぽう、豊富な森林資源を利用して木製の重厚で彫刻などの装飾をほどこした家屋を作ってきた。棚田による水稲耕作で名高いベツィレウと、焼畑で陸稲を栽培するタナーラにはさまれたかたちで、ザフィマニリの生業は米作の欠如というきわだった特徴をもっていたわけである。

現在、ほとんどのザフィマニリの集落では谷間あるいは低地に作った水田による稲作がおこなわれている。古いところでは70年ほどの歴史をもっているが、イファシナでは数年前に死去した最長老がすでに成人してから水田作りがはじまったとのことであり、この証言が正しければ、たかだか50年ほど前のことである。しかも水田の多くは1983年以降に作られたものだという、それまでは集落の周囲、とくに現在水田となっている東西2本の沢筋の土地は、今の景観からは想像もできないが、「大きな森」(ala be)であったという。80年代にアンピミトゥンプ行政村に属するザフィマニリ集落を調査したブロックがほんの周縁的にしか稲作には触れていないことから考えても、彼らの生業における稲作の位置づけは最近までごく低いものだったと言ってよい（Bloch 1998）。こうした歴史を裏付けることでもあるが、イファシナでは新たな水田作りは現在なお進行中の事業である。

日常の食生活の面でも米食は中心的な位置を占めていない。ザフィマニリの家屋の中心近くにある囲炉裏には、全粒のトウモロコシ粥の鍋がほぼ1日中置かれており、これが彼らの常食である。これに次ぐのがタロイモ、おかずとして珍重されるのは水煮されたインゲンマメである。このほかキャッサバとジャガイモが作られているが、食物としての重要性はやや低い。野菜類はほとんど作られていない。冷涼な気候ゆえに、イファシナあたりではバナナ、サトウキビも生育に適しない。家畜・家禽としては牛、ブタ、ニワトリのほか、少数の七面鳥が飼われている。栽培植物のうち在来のものがタロイモ

のみであることを見ると、ザフィマニリというかマダガスカル全島において、これこそが米以外では本来中心的な作物であったと考えたくなるし、その蓋然性は高いであろう。

森林が減退するなかでもっとも効率の良い稼ぎ方、いわば生存の戦略は、伝統のなかで生まれた木彫の技術に頼るか、あるいはさらに粗放なかたちでは、木材伐採の技術に頼ることである。ザフィマニリの全域にわたって、後者の道を生かすべく、多くの男たちがマジュンガからムルンダヴァにかけてのマダガスカル西海岸の伐採キャンプに出稼ぎに出ている。2000年当時のイファシナの場合、5月から8月にかけては、村内に壮年の男はほとんど残らないほどであった。ふつう彼らはグループをなして同じ雇用主のもとで働き、キャンプでの生活も共同でしていたという。季節労働の終わりには、ひとりあたり最低でも100万 FMG（マダガスカルフラン、当時1 FMG は約0.03円）をもって帰村していたそうである。

2002年にはじまったラヴァルマナナ前政権下で森林の商業的伐採が大きく規制されたため、2011年現在、木こりとしての出稼ぎは止まっていると言うが、木彫にせよ伐採にせよ、ザフィマニリが森林との深い関わりをもつ生活のなかで身につけた技能の遺産であり、この遺産が外部の世界との関わりをなかで、そしてそこでのみ現金のかたちで生業化しうるものとなっている（いた）のだと言ってよい。

ザフィマニリのすべての住民はキリスト教徒である。カトリックの村とプロテスタントの村、および少数ではあるが両者が混在する集落がある。全50戸ほど（2011年で54戸）からなるイファシナで興味深いのは、以前はすべてがカトリックだったこの集落に、ルーテル派のプロテスタントが根を下ろし始めていることである。この集落は南の山側から北の谷側に延びる尾根の突端に作られているのだが、その南側に集中して住む5人の兄弟姉妹を中心とするこのプロテスタントのグループは、村の南端、つまり村の土地では高い位置に自らの教会堂を建設中である。村の北端（低い位置）には石造りのカトリック教会がすでにあるから、この集落は形態的には南と北とで二分される方向に進みつつあるようにも見える。しかし、こうしたキリスト教の現在の動態にもかかわらず、ザフィマニリもまた、大きな枠組でのマダガスカル固有の死と死者に関わる習俗と儀礼を維持していることは前節に見たところでもあり、イファシナのヴァトゥ・ラヒ建立もこの文脈で語られることになる。

3.2 ヴァトゥ・ラヒ建立儀礼

ヴァトゥ・ラヒは人の死後1年ないし数年経ってから立てられることになっている。かなり緩い意味ではあるが、それは死者の「記念」のために立てられるものだと言ってよい。だが死者の身体（遺体）に関わることはいっさいない。これはベツィレウのかつての習俗と共通していると思われる。この死者「記念」の習俗と、いわゆる二次葬（複葬）的な身体への再処理を相伴うメリナのファマディハナとは異なる習俗系列に属す

ると思われるが、前節で見たように、マダガスカル国民文化を代表しつつあるメリナの影響下であろうが、今日ではファマディハナを行なうことに慣れたザフィマニリ村落も少なくないようである。

新旧両派のキリスト教の現在も進行中の競合動向とともに、死に関わるこうした2系列の習俗の並存は、他の点では単調に見えるザフィマニリの宗教生活に関わる状況をやや多層的なものとしていると言える。ちなみに、イファシナ集落にはその南北の両端に1つずつの現行のヴァトゥ・ラヒ群の壇が存在する——その他、刻み文字のない、あるいは消えてしまったヴァトゥ・ラヒから成る古い壇が南北それぞれ1つあり、その1つからはかろうじて1949年の字が読み取れた——が、これは直接には集落の新旧キリスト教の分派的配置とは関係するものではなく、ザフィマニリ集落一般に広く見られるという空間的（場合によっては社会的）な二分法（これをブロックは moiety と表現している）を反映しているものとみなしたほうがよさそうである。

この二分法を緩やかに反映するものとして、南側の壇に建てられたヴァトゥ・ラヒのうち、その南半分にある15のものは、イファシナ集落の北側の住民世帯の死者、北半分にある29ないし30のものは、南側の住民世帯の死者のためのものであるという。またヴァトゥ・ヴァヴィは、この壇には2つある。それぞれ北側と南側の死者のためのものであり、ヴァトゥ・ラヒとは異なり、死者個人のものではなく、集団としての住民の低位区分に対応している。この円盤状の石の上には、時に応じて死者のための食物が供物として置かれるという。したがって、この壇の配置に見られるのは二重の二分法ということになる。とりわけ、壇という空間内部の二分法が集落のそれと位置的に逆転していることには興味をそそられる。

以下の記述は1999年10月20日から25日までの私のイファシナにおけるヴァトゥ・ラヒ建立に関わる観察記録である。

この年は9月27日から3日間イファシナに入ったが、いったん首都に戻り、そのうえで10月5日にふたたびこの集落に戻った。その後はイファシナに滞在するとともに20日まではザフィマニリの複数の他集落訪問も行なっていた。

アントゥエトラの週市は水曜日に開かれる。10月20日はこれに当たった。23日のヴァトゥ・ラヒ建ての儀礼あるいは祭（lanonana）のためと言って、私の年来の寄宿先の主婦は白米70缶——kapoka という単位で1缶は1合半から2合弱に当たるか——を買い入れた。このための購入資金は計算上は4400 FMG に当たるはずだが、これは同日彼女が週市に持って行って売った赤インゲン豆23缶の売り上げ高2300 FMG には及ばない。その日の朝に私が渡した2500 FMG を不足分に充当したと思われる。この家の主人は実は前年に死亡していたのだが、今回のヴァトゥ・ラヒ建立は彼のためのものではなく、こうした米の用意はイファシナの集落委員長（president）役を務める義理の甥がその亡父に対して行なう建立儀礼に対しての協力であるとのことであった。



写真4 切り出し場

集落委員長の家のこうした糧食の用意については調べていない。また我が寄宿先家の主婦は亡くなった夫のためのヴァトゥ・ラヒはすでにあるが（つまり、切り出してあるが）、いつ建てるかはまだ分からないと言っていた。集落委員長その人は、寄宿先の亡き主人の息子を含む他の村民とともに、西海岸での森林伐採現場への長期の出稼ぎから12日に戻ってきていた。分析的に語ることはできないが、ヴァトゥ・ラヒ建立の儀礼の直前準備と、それに要する経費の意味合いは、おそらくここから伺える程度のものである。

10月21日。この日は「牛の捕獲」(sambotra omby)が行なわれることが村民に知らされていた。前もって建立儀礼の主催者である集落委員長は捕獲対象となる牛を用意して、集落の牧地に放しておいたらしい。11時ころ大人も子供も合わせて50人内外の男たちが集落から45分ほど離れた牧地に集まる。牧地は集落の東に連なる小高い丘陵を越えたところであって、周りを森に縁取られた草地である。男たちのうちごく少数のものは槍を携えている。残りの多くは山刀をもってきている。子どもたちは木槍を作ったりしている。人びとは特に合図があるわけでもなく「牛探し」(masiaka omby)に散っていったが、13時30分ころになると、口々に「(牛が)見つからない」と言って三々五々戻ってきた。これらの人びとに対し、集落委員長は牛がいること、牛の形状、色について演説のように語りはじめた。集落委員長の家の女性数人がバケツに粒トウモロコシ粥をもってきて、人びとに昼食用にふるまった。14時をすぎると、小雨が降り出し雷鳴も轟くようになったので、私は女性たちおよび1人の男とともに集落に戻った。15時半すぎには本降りの雷雨となったなか、多くの男たちも戻ってきたが、結局牛は見つからずじまいだったという。夕刻、集落委員長の家で明日の段取りを伝える集まりが開かれたが、これには臨場しなかった。

10月22日。朝から午後早くまでは、村民一般はとくに儀礼に関する活動を行なっていなかったようである。16時10分になって、集落のほぼ中央に位置する広場(kianja)で、「牛の殺害」(mamono omby)が行なわれた。私がおその場に着了たとき、牛の横には枝

葉を着けたユーカリ樹が敷かれていたが、これにはとくに象徴的な意味はないと思われる。木柱にひもで縛られた牛の首筋に包丁が入れられて殺された牛は、そのまま全身の皮を剥かれ、斧で大きな部分に断ち分けられた。切断された肉のほとんど部分は集落委員長の母の家（集落の南端に近い）に運ばれたが、残った一部の肉（とくに肩と腰の部位）は集落の各戸にはほぼ平等に分配された。「各戸ひとつ」（*isan' ny varavara, isan' ny trano*）などと口々に言い、集落の北から順に家の名を呼んで肉片（目算では150から200グラム程度のもの）を手渡した。こうした作業も1時間程度で終了し、18時すぎからは集落長の母の家に人びとが集まって翌日、つまりヴァトゥ・ラヒ建て当日の段取りについての確認が行なわれた。集まった人数は40人程度だったが、おそらくは集落の構成戸を網羅しよう。プレッシャーランプの灯りの下、翌日にやって来る他集落からの訪問客への食事接待の場の割り当て手配の伝達あるいは確認が行なわれたようである。近くのアリアリヴ Faliarivo 集落——ここには、プロテスタントの一派 FJKM の大きな教会がある——からの客が一番多いから、と言ったことが話し合われていた。

10月23日、ヴァトゥ・ラヒ建立当日。朝早く、集落委員長の母が用意した米の量を確認している。400缶（ということは6〜7斗くらいか）あるという。7時45分、私は村人数人とともに集落の西側の沢を隔てた岩山に向かい、8時10分に切り出された複数のヴァトゥ・ラヒが横たわる現場に到着。この岩山の巨大な岩の塊の基底部に、この集落の墓として複数の横穴が掘られている（私は視認していない）。現場にはすでに20人ほどの男たちがいて、今回建てることになるヴァトゥ・ラヒを周囲の草でくるんでいる。それを木の枠組みの上に乗せると、ちょうど男たちによって担がれる御輿ようになる。長老たちの挨拶があり、8時30分から3基のヴァトゥ・ラヒ御輿が山を下る。それぞれ6〜7人によって担がれるヴァトゥ・ラヒ運びは、まさしく祭の御輿担ぎの雰囲気であり、かけ声をかけつつ、一気に坂を下りてゆく。沢を渡り、集落住宅部の北部に達したところで、2つのヴァトゥ・ラヒを北端の壇に置き、残りの1基を担ぐ人びとは住宅部を貫いて集落南端まで練り歩いて行く。

10時から11時にかけて、南端部のヴァトゥ・ラヒ壇に1基のヴァトゥ・ラヒを建てる



写真5 御輿かつぎ



写真6 建立

作業が行なわれた。この1基のヴァトゥ・ラヒは若くして死んだある夫婦者のためだというのが、親族関係の詳細は調べ損なった。北端の壇にも2基が建てられたが、建立作業は南北ほぼ同時に進行したので、そちらの作業は見えていない。おそらく、そちら側に集落委員長の亡父のものがあつた可能性が高い。

南端の壇では、集落の最長老の1人が昨日殺された牛の血をたらいから掬いだし、これまでに立っていたヴァトゥ・ラヒと新たに立てられるヴァトゥ・ラヒに塗る。長老はこれまでのヴァトゥ・ラヒを指して、若者たちに「この石は誰その石で、誰々を生んだ……」といった内容のことを語った。壇の中央部は石が密集していたので、新たな1基をそこに立てるに際して、いとも無造作に古い石をはずして移動させた。どうやら石を立てること自体は実際の作業であつて、儀礼的に意味あるとされるのは血を塗ることにあるようで、ここで血を塗った後、長老たちは残りの作業はそのままにして、北端のヴァトゥ・ラヒ壇に向かって行き、そこでもすでに立てられた新しいものも含めたヴァトゥ・ラヒに血を塗っていった。

他の集落からの客人の到来は11時ころから始まっていた。彼らは集落ごとに集団をなして到着する。この朝にはあらかじめどの家がどの集落の客人の接待をするかの割り当て表が回覧されていた。その表には、この集落に通じる南北および東の3つの道ごとに到来する集落が分類されていた。遠いものでは、徒歩で5時間程度の道のりの集落が含まれていた。

12時すぎから、集落内の各戸で接待の食事が始まる。この地の祭につきものの、皿に米飯と牛肉片1つを乗せたものがリレーのようにして客人の手に渡ってゆく。牛肉を煮ているのはどうやら1軒の家である。午後一降りの雷雨があつて、16時45分から集落の広場に長老たちと客人の一部が集まり、公的挨拶(kabary)とも言うべきものの交換が行なわれた。それまで集落委員長の母の家に留めてあつた牛の頭が広場の中央に置かれ、それを前にして長老が儀礼(lanonana, ザフィマニリ方言では /lanjunana/ と発音される)が終わつたことを言祝ぎ、これからの繁栄などを祈る言葉を発する。こうした挨拶は何人もの人びとによって行なわれ、しめて45分ほど言葉が交わされた。この夜はふた

たび雨になったが、遅くまで広場の横の家で楽隊が演奏を続けた。

10月24日。8時15分、南端のヴァトゥ・ラヒ壇に人びとが集まってくる。ヴァトゥ・ラヒに地元製のラム酒 (toaka) をかけ、長老たちが祈りを捧げる。このとき人びとは壇の西側に集まり、東面しなくてはならないとされている。新しいヴァトゥ・ラヒを水で洗い、続いてこれまでに立っていたほとんどすべてのヴァトゥ・ラヒに一昨日殺した牛の脂を塗る。これらのいかにも儀式的な作業を *manavo vato* と呼んでいたが、この語義は私には不明にとどまった。これが終わった後、人びとは、その場に持ってこられていた米飯と牛肉を一口ずつ食べた。人びとは壇の周囲の草むしりをはじめた。続いて、集落北端部のヴァトゥ・ラヒ壇——北端部には壇が2つある——でも同じことを行なった。新しいヴァトゥ・ラヒ2基は、2つの壇のうちでも最北端の方に立てられていたが、このとき一昨日殺された牛の角が最北端の壇の上に置かれた。これらすべてが終わったのは9時45分ころである。

この朝の一連の作業 (儀礼) に加わった人には老人と子供が多かった。日曜日とて、これらの作業 (儀礼) 中にも、集落北部にあるカソリック教会では礼拝が行なわれており、賛美歌が聞こえて来ていた。壮年層の人びとは、それぞれに自分の所用に向かっていたらしい。たとえばこの年に私が泊っていた家のまだ若い主人は、この集落から徒歩4時間ほどかかる別集落に、4時というまだ暗いうちから出かけていった。11月1日にアントゥエトラで行なわれる予定になっている親族のヴァトゥ・ラヒ建立儀礼に使うために、米を集めに行ったのだという。

夕方18時から19時10分にかけて、広場の南側の家で、集落の集会 (*milaza fokon'olona*) が開かれた。この場で、私の年来の寄宿先の亡き主人のためのヴァトゥ・ラヒ建てを来たる11月5日に行なう旨が通知された。この場に出ているのは世帯の代表として男だけである。私の寄宿先からは亡き主人の息子が出席していた。つい数日前までは、これを何時するのか分からないと言っていたのだから、私としてはかなりびっくりした。ヴァトゥ・ラヒ自体は切り出されているのだから、あとは金銭的な用意かとも思っていたが、それにしてもこうしたことはあっけなく決まるものではあるらしい。11月7日に帰国予定の私はその前に首都で用事もあったので、これには臨場できないことがはっきりしていた。その夜、来るべき祭への寄与として、25万 FMG を寄宿先の主婦とその生さぬ仲の息子に手渡した。

10月25日、人びとは畑仕事その他日々の仕事にかかり、すべては普段の生活に戻った。10月26日、私はこの集落を後にしてアントゥエトラ経由でアンブシトラの町に戻った。

4 これからの課題

第3節の記述は民族誌の基準から見てきわめて不十分なものである。なによりも私は

現地語の理解能力が初歩にも達していず、儀礼のなかで発せられた祈りの言葉や、公的挨拶の言葉、準備を含む祭の諸段階で交わされた議論などについて語るができない。それらの一部は MD を媒体として録音してあるので、将来そうした資料への言及が可能になるように努めたい。

また、ヴァトゥ・ラヒによって「記念」される死者と、祭の主催者を中心とする生者とのあいだの緻密な親族関係についても、データには不十分な部分が多い。そのせいでもあるが、イファシナの集落の南北両端に設けられているヴァトゥ・ラヒ壇のあいだの関係が親族関係に由来するものなのか、それとも——あるいはそれ以上に、というべきか——ザフィマニリに特徴的ともされる空間的な二分法に関連するものなのかについて、確定的なことはここでは言えないでいる。おそらく、これについて語るためには、南北の2つの壇にある多くのヴァトゥ・ラヒ、およびヴァトゥ・ヴァヴィについての、人びとの記憶を収集して、それぞれの石の背景を辿らなければならないであろう。

さらに儀礼全体の十分な記述のためには、私が目にするものの出来なかった家屋のなかでのさまざまな行為についての観察が必要である。1人で行なう調査である以上、このためには祭への臨場が何回か繰り返し行なわれなければならない。

こうした不十分さを棚上げすることになるが、最後にザフィマニリにおけるヴァトゥ・ラヒの建立とファマディハナの導入との関係について、現在仮説として考えているところを述べておきたい。

ファマディハナもヴァトゥ・ラヒも lanonana である。この言葉は儀礼あるいは祭一般を指す語なので、それ自体はさほど弁別の意味をもたないが、ある集落があたかも集落をあげてであるかのように、周囲の諸集落からの客人を招き、大きな祭をするといった趣を含んでいる。ドイツの民族学者がインドネシア諸地域の基層文化に存在を指摘する「大祭」(Großfest) にいくぶん似たところがある (Stöhr und Zoetmulder 1965)。「大祭」という語が用いられる所以は、その開催の契機は地域、民族によって多様に変異するが、集落の中心的な祭として社会的意義とともに、多くの場合宇宙論的な意味が大きいとされるからであるが、ザフィマニリのヴァトゥ・ラヒ建立にしても、導入されたファマディハナにしても、社会的意義はともかく、宇宙論の意味はおそらくもっていない。

ザフィマニリにおいては、死をめぐる祭よりも、むしろ家屋建築を祝う祭 (lanonana trano) の方が宇宙論的な意味を内包していると言えるかもしれない。その点では、ザフィマニリはメリナほどには死の習俗をみずからの文化的アイデンティティの軸に据えてはいないのだと言ってよい。おそらくこのことが、遺体の再度、再々度の取り扱いを含むファマディハナと、いっさい遺体には関与することのないヴァトゥ・ラヒ建立という、「死者」の表象のあり方としては逆向きのようにも思われる2つの習俗を、集落によっては併存させて問題なしとしてきた理由であろう。遺体に関してだけでなく、この2つの

習俗は死者の個別性——たとえばヴァトゥ・ラヒに刻まれた死者の名と死亡の日付——を日常の生者の空間にどこまで留まらせておくか、という点に関しても大きく異なるようにみえるだけに、この併存のありようはさらに追究すべきテーマだと思う。

今のところ（完全に確認したわけではないが）、ザフィマニリにおけるファマディハナの導入は、アントウエトラとアンブヒミトゥンプという行政村の中心集落においてのみ見られるようである。もしこれが正しい状況把握であり、またこのことに意味があるとしたら、首都のメリナの習俗あるいは流行を取り入れるのに相応しい位置にある（あるいはそれに近い）人びとから、これが始まると言うことはできよう。事実、アントウエトラでのファマディハナに先立って、1997年9月の初旬にアンブヒミトゥンプで行なわれたファマディハナは明らかに土地の有力者で、首都にも家を構えていると言われるほどの実業家が主宰したものであった。

いずれにせよ、ほとんどすべてはこれからの課題である。

文 献

Bloch, Maurice

1971 *Placing the Dead: Tombs, Ancestral Villages and Kinship Organization in Madagascar*. London: Academic Press.

1998 *How We Think They Think: Anthropological Approaches to Cognition, Memory, and Literacy*. Oxford: Westview Press.

Coulaud, Daniel

1973 *Les Zafimaniry: Une groupe ethnique de Madagascar à la poursuite de la forêt*. Antananarivo: F.B.M.

Hertz, Robert

1960 *Death and Right Hand*, translated by Rodney and Claudia Needham. London: Routledge.

Huntington, Richard and Peter Metcalf

1979 *Celebrations of Death: the Anthropology of Mortuary Ritual*, Cambridge: Cambridge University Press.

森山工

1996 『墓を生きる人びと』東京：東京大学出版会。

Stöhr, von Waldemar und Piet Zoetmulder

1965 *Religionen Indonesiens* (Die Religionen der Menschheit; Bd 5-1). Stuttgart: W. Kohlhammer.

内堀基光

1997 「マダガスカル学ことはじめ」『創文』386：11-15.

内堀基光・山下晋司

1986/2006 『死の人類学』東京：弘文堂／講談社。